

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻
フィールドリサーチ領域
鹿嶋 恵

【論文題目】 「道順説明」の談話における概念化と相互作用に関する研究

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

鹿嶋恵氏の論文「道順説明」の談話における概念化と相互作用に関する研究は、地図を用いて道順を説明するという課題達成実験における話し手（説明者）と聞き手（被説明者）のやり取りに関する詳細な談話データに基づいて、状況の意味理解（概念化）をめぐって両者の間にどのような相互作用があるかという点に着目しつつ、両者が共通理解に至るプロセスの詳細を認知的側面と言語的側面の両面から解明しようとするものである。分析の対象とする談話データは、被験者がともに日本語母語話者の場合1種10組、どちらか一方が非母語話者の場合2種各10組、計30組を対象とし、三通りの道順説明を一セットとして氏自身が実施した実験に基づく膨大なデータである。

第Ⅰ部（第1章～第4章）「母語場面での「道順説明」の概念化と言語表現」では、被験者が共に母語話者の場合における単純な道順説明のデータを用いて、道順を説明する談話には「参照点」「方向」等の基本的な構成要素があることを確認し、その上で、「参照点」の概念化には複数のパターンがあること、また、説明者と被説明者の両者が言語的相互作用を通して合意に至るダイナミックなプロセスがあることを明らかにしている。

第Ⅱ部（第5章～第6章）「道順説明」での概念化に関するトラブルと相互作用」では、被験者のどちらか一方が非母語話者の場合の談話データをも分析対象として、説明がうまくいなくなる「トラブル」の発生に関して、「参照点」の概念化の不一致が主要な要因であることをまず確認する。その上で、トラブルは談話実験の初期段階で生じる場合が多いこと、被験者がともに母語話者である場合には言い換えによる確認等のやり取りが数多く観察されること、被説明者が非母語話者である場合にはそうしたやり取りがうまく機能しないことを指摘している。

第Ⅲ部（第7章～第8章）「環境的障害によるトラブル解決の談話構造と相互作用」では、両被験者の持つ地図のある箇所の違いがあるために必然的に問題が生じるように仕組まれている実験の談話データに基づいて、トラブルの発生と解決のメカニズムを解明しようとする。その結果、トラブルの解決に至るプロセスには一定のパターンがあること、解決策の提案に至るプロセスにおいては被説明者の果たす役割が重要であること、非母語話者が被説明者である場合には被説明者が主導的な役割を果たすことがなく、何度も同じやりとりが繰り返される傾向があること等が確認されたとしている。

鹿嶋氏の研究は、課題達成実験という状況下で収集された独自の談話データに基づいて、「道順説明」という言語コミュニケーションを、談話分析の手法によって話し手（説明者）と聞き手（被説明者）の間に実際に生じている相互作用を談話の構造的特性として抽出することにおいても、また、概念化における協働構築的認知プロセスとして解明することにおいても、十分評価に値する成果を示している。ただ、トラブル発生時における聞き手（被説明者）の役割に関する示唆に富む指摘があるものの、その点の詳細に関しては十分解明できていない。だが、この点は論文の価値を損なうものではない。氏の収集した談話データを最大限活かして、今後この点の解明に氏が積極的に取り組むことが期待される。また、日本語教育への応用という点に関しても、氏の研究は発展性を大いに期待させるも

のであると言える。

以上の所見により、学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成26年1月17日（10：20～11：50）、文法棟社会文化科学研究科長室において、口述試験を実施した。

また、上記の者は、同年1月25日（13：00～14：00）、文法棟A2教室において、学位論文について公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分であると判断され、審査委員会は、博士（文学）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査	岡部	勉
委員	福澤	清
委員	渡邊	功
委員	山下	徹
委員	牧野	敦
委員	大浜	るい子